

## 戦後移動図書館実践史：千葉県立図書館「ひかり号」担当者の 山崎宏氏，大多和誠氏へのインタビュー記録をもとに

A Study on the History of Practices of Chiba Prefectural library's  
Bookmobile "Hikari" in Postwar JAPAN : Interview with  
Mr. Hiroshi Yamazaki and Mr. Makoto Ohtawa

石川 敬史<sup>1)</sup>  
Takashi ISHIKAWA

大岩 桂子<sup>2)</sup>  
Keiko OIWA

### 要 旨

戦後日本の移動図書館は高知県や千葉県で早期に開始されたといわれている。千葉県の移動図書館「ひかり号」は、GHQの払下げによるトラックの改造車で、1949年9月に巡回を開始した。現在、著者らは1950年代前半の「ひかり号」の活動に焦点を当て、図書館員がどのような意志で実践を積み重ね、地域住民に何をもたらしたのかを検討している。

本稿では、資料ではうかがい知ることができない事柄を明らかにするため、これまでの調査で実施した「ひかり号」に携わった元図書館員へのインタビュー記録に基づき分析した。その結果、戦後、混迷とした時代に図書館員が移動図書館を通して地域に深く溶け込み、地域住民との信頼関係を築きながら、図書館活動を積み重ねていたことが明らかになった。このことは、移動図書館の限界を乗り越え、図書館員が地域と図書館を着実につないだことを意味した。

#### 1. はじめに

移動図書館とは、「公共図書館が図書館を利用しにくい地域の住民に対して、何らかの移動手段を用いて図書館資料を運び、図書館員による図書館サービスを提供する方式」<sup>1)</sup>であり、戦後は高知県や千葉県で早期に開始されたといわれてい

る。千葉県の移動図書館「ひかり号」<sup>2)</sup>は、GHQの払下げによるトラックの改造車で、自由に図書を選択できる外向きの書架やスピーカーが装備され、1949年9月に巡回を開始した。

現在、著者らは1950年代前半の「ひかり号」の活動に焦点を当て、図書館員がどのような意志で

<sup>1)</sup>十文字学園女子大学21世紀教育創生部

Division for Arts and Sciences, Jumonji University

<sup>2)</sup>元（公財）千葉県教育振興財団文化財センター

Former Chiba Prefectural Education Foundation Cultural Properties Center

キーワード：移動図書館、日本図書館史、千葉県立図書館、図書館員、オーラル・ヒストリー

実践を積み重ね、地域住民に何をもたらしたのかを検討している。戦後移動図書館活動を検証することによって、移動図書館の意義とともに、地域に位置する図書館のあり方や、図書館と地域住民との関係性を考察できよう。これまでに著者らは、「ひかり号」の研究視角を整理し<sup>3)</sup>、さらには映画会活動を分析した<sup>4)</sup>。本稿では、資料ではうかがい知ることができない事柄を明らかにするため、これまでの調査で実施した「ひかり号」に携わった元図書館員へのインタビュー記録の一部を用いて分析した。

すでに、1990年代頃よりフィールドワーク<sup>5)</sup>やオーラル・ヒストリー<sup>6)</sup>などの定性的な研究手法に注目が集まっている。図書館史研究においても、『中小都市における公共図書館の運営』（略称『中小レポート』）の調査<sup>7)</sup>を代表例に、最近では安藤友張<sup>8)</sup>、小林卓<sup>9)</sup>などが鋭い視角によるインタビュー調査と記録化が着実に進められており、著者らもこうした研究手法の長短を踏まえ研究を進めている。

かつて宮本常一は、1972年に「調査地被害」を報告し、「人文科学が訊問科学に」と指摘した<sup>10)</sup>。

……ある大学の調査団がやってきた。そして訊問型の調査が行われたらしい。根ほり葉ほり聞くのは良い。だが何のために調べるのか、なぜそこが調べられるのか、調べた結果がどうなるのかは一切わからない。……略……「そんなことを調べて何にするのだ」と聞いても「学問のためだ」というような答えだけがかえって来る。村人たちがその言葉を聞くと、そうかと思って協力したというが、「疫病神が早く帰ってくればよい」と思ったそうである。ところが調査に来たのは、この仲間だけではない。それから一、二年してまた別の大学が、同じようなことを調べに来た。……

1950-1960年代の話であるが昔話として扱うことはできない。1990年代に入っても、民族学の領域ではあるが、同様の指摘がなされている<sup>11)</sup>。も

ちろん図書館においても、図書館員が仕事をつくりあげている複雑な状況への深い洞察と配慮が必要である。このことを踏まえながら、今後も元図書館員や利用者へのインタビューを継続しつつ、「ひかり号」関連資料の分析を進めていく。

なお、紙数の都合上、本稿に記載したインタビュー記録については内容を整理して掲載し、年の表記は西暦で統一した。

## 2. 略歴

インタビュー対象者の大多和誠、山崎宏の略歴は下記の通りである（本文は敬称略）。

### 2.1 大多和誠氏

1931年5月31日生まれ。1949年の高校生時代、自宅付近（市原郡）に「ひかり号」の巡回があり、館長の廿日出逸暁や職員の大岩好昭が自宅に宿泊する機会があった。これが契機となり、千葉県立図書館の採用試験を受験し、1950年4月15日に採用された。1958年3月31日まで「ひかり号」を担当し、その後は館内奉仕課等で勤務した。

### 2.2 山崎宏氏

1929年6月18日生まれ。1950年7月15日千葉県立図書館に採用され、「ひかり号」の移動図書館担当になった。採用当時は、山崎とともに大岩好昭、藤堂良治（山崎と同日採用）の3人が「ひかり号」担当であった。以後、1970年代まで「ひかり号」を担当し（館外奉仕課長等歴任）、館内奉仕課長等を歴任した。

## 3. インタビューの分析

2011年9月11日（日）

大多和誠氏自宅（千葉県白子町）

13:00~15:00

### 3.1 「ひかり号」との出会い

大多和誠は「ひかり号」の利用者であり、その

後、千葉県立図書館「ひかり号」を担当する職員になった。

「ひかり号」は、1949年9月14日から巡回を開始したが、8月13日から15日まで試験巡回を実施した<sup>12)</sup>。8月13日の巡回ルートに市原郡が含まれていたことから、大多和誠の自宅（自治会長宅）へ館長の廿日出逸暁<sup>13)</sup>、職員の大岩好昭<sup>14)</sup>が宿泊していたことがわかる。巡回先の宿泊場所として各地域の役員の自宅に宿泊していたことは、市原郡に限らず、各地の巡回先でも同様であった。宿泊先では、各地域のさまざまな話題や農家の近況など聞く機会になり、図書館員が地域の中に深く溶け込んでいたことがわかる。

「千葉県訪問図書館ひかり友の会」による機関誌『ひかり』（以下、『ひかり』とする）には、1952年2巻3号より、「ひかり号」を担当する図書館員が、「ひかり巡回町村」と題して各郡や町村の利用状況をはじめ文化、歴史などを毎号執筆している。このことから、「ひかり号」担当者は各地域の特色を熟知していたことがうかがえる。まず、「ひかり号」巡回の初期から担当していた大多和に「ひかり号」との出会いを聞いた。

石川：大多和さんの「ひかり号」との出会いや、「ひかり号」に携わった経緯をお聞かせいただけますか。

大多和：私が図書館と出会ったのが1949年8月です。私が住む市原郡、現在の市原市に「ひかり号」が来たのです。高校は市原高校ですけれども、たまたま私が夏休みだったもので

すから、利用者になったわけです。それが「ひかり号」との出会いです。それで、当時は映画もやりまして、私の住んでいる集落でたまたま私の親父が自治会長をやっていたので。廿日出逸暁館長、大岩好昭さん、もう一人が私の家に映画が終わってから泊まってくれたんですよ。それで廿日出さんが、「この移動図書館は、農村地帯で文化も本屋もない農村地帯に回らせるんだ」と。私は気安く廿日出さんって申し上げましたけど、当時の館長さんが私の家に泊まって夕飯を食べながら雑談しました。

### 3.2 「ひかり号」の利用者

「ひかり号」の巡回が始まった当時、自動車の数は非常に少なかった。千葉県内の1952年の自動車台数は13,747台（うち大型貨物用四輪車は2,625台）であり、主に市部に集中していることから<sup>15)</sup>、自動車の存在は農村漁村部では珍しく、「ひかり号」の存在が人を引きつけたといえる。『ひかり20年史』には、「高らかにメロデーを奏でながら、ツートンカラーの当時としては派手な宣伝車スタイルで農村に向かったのであるから、素朴な農村の人々を驚嘆させたことは想像以上であった。」<sup>16)</sup>とある。

「ひかり号」の利用者（1951年度）については表1の通りであった。男性が多く、職業では農水産、教育、公務員で約80%を占めていた。他方で、「ひかり号」利用者の年齢を示すデータは少ない。表2によると、1952年時点では20歳代が最も多く、

表1. 「ひかり号」職業別登録者数（1951年度）（人）

	農水産	鉱業	商交通	公務員	教育	学生	その他	無職	計
男	4,689	403	696	2,173	2,141	377	174	475	11,133
女	1,615	77	163	1,145	1,293	326	142	859	5,615
計	6,304	480	859	3,318	3,434	703	316	1,334	16,748
%	37.6	2.8	5.1	19.8	20.5	4.2	1.8	7.9	100

典拠：文部省社会教育局編『移動図書館の実態』1953.11, p.14.

表2. 「ひかり号」年齢別登録者数（1952年度）（人）

区分	男	女	計	%
19才まで	1,796	2,126	3,923	18.0
29才まで	5,670	3,190	8,860	42.7
39才まで	2,222	1,200	3,422	16.4
49才まで	1,794	746	2,540	12.3
59才まで	1,022	240	1,260	6.0
69才まで	402	98	500	2.4
70才まで	72	14	86	0.4
不明	106	48	154	0.7
計	13,084	7,662	20,746	100

典拠：千葉県立中央図書館創立30周年記念事業後援会編『千葉県立中央図書館三十年略史』1956.3, p.110.

次いで10歳代<sup>17)</sup>、30歳代であった。しかし、大多和の証言からわかるように、千葉県臨海部における工場の進出に伴う若手労働者の雇用、さらには「ひかり号」利用者の固定化から、しだいに利用者の年齢層が上昇したことが推測できる。

「ひかり号」に積載していた図書については、インタビューから、新刊書数が少なかったため、各ステーションで図書館員が「操作」していたことがわかる。社会環境の変化に伴い利用者層も変化する中で、図書館員は貸出方法など「ひかり号」の運用方法を柔軟に対応しながら利用者を追い求めていた。大多和と山崎は、当時の「ひかり号」の利用状況や積載している新刊図書について次のように語っている。

石川：当時、地域の皆さんは「ひかり号」に対してどのような反応でしたか？

大多和：珍しかったですね。本屋も何もないんですから。小学校だって高校でもそんなに本は無いわけですから。

石川：自動車も珍しかった……

大多和：ああ、車も珍しいですよ。

石川：どのような利用者が多かったですか。

20歳代とか10代後半の方とか……

大多和：中年が多かったですね。中年が多くて、

1955年くらいまでは若い人も多かったですけども。京葉工業地帯ができてから、若い人はマイクロバスに乗っているいろんな作業に行っていましたよ。それで、利用者が減ってきちゃったので、最初は個人貸出しでやってたんですが、利用者が減ってきたので団体貸出しも併せてやるようになった。

大岩：「ひかり号」に積んでいたコレクションは、図書館に戻ってきたら全部交換するのですか？

大多和：出発する時、新刊書は少ししか買えませんからね。だから50、60冊ですよ。多くてね。で、車の中の書棚に入れておいて、ステーションに1冊か2冊ずつ出していく。それではないとね、その本がひと月3週間なら3週間、そこに留まってしまう。だから、そういう操作も我々がしました。

大岩：人気の本は複本もあったのですか？

山崎：複本？ありましたよ。車が3台の時には、だいたい3冊は買うんですよ。

大多和：いわゆるベストセラーはね。それで、リクエスト制度もある程度認めていました。

### 3.3 巡回ルート

「ひかり号」の巡回ルートは、図書館員が実際に巡回しながら微修正を繰り返していた。「ひかり号」の1号車は、GHQの払下げられたトラックの改造車であったが、外部から巡回ルートに対する指導はなかった。図書館員が主体的に県内の巡回ルートを開拓し、ステーションにおける運用方法も図書館員が支援した。

各ステーションにおける貸出冊数は、地域により異なっていた。これは、町村の教育委員会、ステーションマスターの考え方に左右されたという。『ひかり』各号に掲載の「ひかり号巡回予定表」によると、各ステーションでは30分間の停車が基本であるが、40分間、60分間の地域もあることがわかる<sup>18)</sup>。

なお、各地域における「ひかり号」の受け入れ組織として、下記のものがあった<sup>19)</sup>。

①千葉県訪問図書館運営委員会（町村運営委員会）

「ひかり号」を受け入れる各市町村が組織する委員会である。1949年8月に実施した試験巡回において、各地で組織されたことを起源とする。規約には、役場代表、公民館代表、教育委員会代表など12名以上で組織され、ステーションマスターの選定や映画会等の開催を協議した。

②千葉県訪問図書館地区協議会

運営委員会の上部組織である郡単位の協議会である。1949年11月に県内3郡でそれぞれ開催された地区協議会を起源とする。各町村の運営委員会の代表らで構成され、「ひかり号」の運営について協議した。

③千葉県訪問図書館中央運営委員会

1951年4月に設立された。この委員会は上記地区協議会の上部組織であり、委員は地区協議会で選出された。設立直後は、千葉県の財政悪化を背景に、「ひかり号」受け入れ市町村の負担金や後援会の創設について協議した。

④千葉県移動図書館後援会

中央運営委員会が1953年11月に創立した組織である。町村運営委員会代表などを委員とし、「ひかり号」の増設に対する市町村負担金をはじめ、ステーションの増設などについて協議された。

こうした各地域での「ひかり号」の受け入れ方法、さらには図書館員がどのように県内の巡回ルートを設定したのかを聞いた。

石川：ステーションによって、各地のステーションマスターの力というのですかね、それは「ひかり号」で巡回してもすぐに分かる……

大多和：分かる。

山崎：あらかじめ冊数が多いところは巡回の予定表を少し伸ばす……

大多和：時間をね。1ステーション最低30分ですけども、貸出数の多いところは40分、50分にしたり。ひかり号の機関誌がありますよね。最後のページに巡回表があるでしょ。停車時間が長いところは貸出数が多いところです。だから絶えずあの巡回表を作るときには、そういうことを調べながらね。

山崎：新しいところを巡回するときに一番困るんですよね。わーって人が来るとね。30分予定していたのが、もう倍くらいかかる。

石川：やはりステーションマスターの方が、その地区に「ひかり号」が来ることをどう周知するかによる……

大多和：そうそう。周知の方法をね。

石川：ステーションでは具体的にどのように周知をしていたのでしょうか。町の広報誌に載せるとか、放送するなどいろいろあったと思いますが……

大多和：放送というのは無いですから、教育委員会の職員やステーションマスターがいろいろな団体に声をかけるかによって、貸出の成績は違いますよ。

石川：なるほど……青年団とか。

大多和：青年団とかいろいろね。教育委員会、社会教育課の人がみんな地域のリーダーを知ってるわけですから。

山崎：これはね、町村の教育委員会がね、こういうものに対してどういう姿勢であたるかということを決まるんですよ。

大岩：「ひかり号」でステーションを回って、例えば30分停まって、何週間ごとに回るんですよと、それは初めからある程度準備されていたのでしょうか？

大多和：そこにステーションを作る場合、車を持っていき、時間を計るってことね。出発地からそのステーションまで何分かかかるか。し

かも、こういう事務がありますよ、机を出してくださいと、事前に……

大 岩：練習のような。

大多和：その町村に行って、説明をして、また次行って……

大 岩：そして新しいルートが作られる……

大多和：そうですね。あらかじめ市町村から申請をとってコースを決めていく。道路地図を見て何キロあるから20分くらいかかるな、とかね。そういう計算は我々がしたと。

大 岩：そこにはCIEからの「こうしなさい」という指導ではなく、図書館のみなさんや、利用者の意見で決まっていたということですか？

大多和：はい。CIEの指導も全然……

大 岩：日々の試行錯誤の中で生まれた千葉方式といいますか、そういうことでしょうか。

山 崎：まあ巡回から帰ってきて、まずいところは修正することがほとんどですね。

大多和：だから大岩好昭さんは、僕とよく映画会がないときは宿屋でね、道路地図を見て、こことここは何分かかってと、次の巡回表を組む話を毎晩のようにやってた。

大 岩：指導とかは全然無い。みなさんで考えて作ったという。

山 崎：何にもその……参考書が無い、見本もないから。

### 3.4 ひかり友の会

「千葉県訪問図書館ひかり友の会」は1951年4月に組織された。これは「ひかり号」利用者の組織であり、友の会の活動として『ひかり』の配布や見学会などが行われた。会費は図書1冊貸出につき5円であったが、1951年度の業務監査報告の中で指摘され<sup>20)</sup>、1952年度からは年額30円となった。

次の大多和の語りから、この友の会は館長の廿日出による着想であり、規約などは上野の博物館

(東京国立博物館)を参考にしてつくられたことがわかる。

石 川：「ひかり号」の機関誌『ひかり』がありますね。そこに利用者やステーションマスターが記事を書いています、図書館の職員の方が依頼をして……

大多和：そうそう。あれは私が担当してましてね。編集会議がありまして、出す度に会議をやりました。

山 崎：で、頼みやすい人とかね。利用者でね。

大多和：それでね、私4月に入って廿日出館長が「君、友の会って知ってるか？」って言うから「知りません」と言ったんだよ。そして「君、上野の博物館行って」と。「博物館友の会ってのががあるから、そこ行って勉強してこいよ」と。それで「千葉県の移動図書館ひかり友の会をつくろう。参考にするから」と。私1人でね、初めて上野の博物館に行っただけですよ。そういう発足の過程があるんです。

石 川：当時、博物館友の会というのは活発だったのですか？

大多和：規約などの資料をもらって、どういう事業をやっているのか。その時は千葉県も美術館とかいろんな博物館もみんな友の会をそういう形で参考にしてつくったんですよ。いわゆる友の会の始まりは上野の博物館の友の会を参考にしたと。

### 3.5 映画会・読書週間

「ひかり号」は図書の貸出以外にも各地で映画会などを開催していた。映写機はナトコ映写機<sup>21)</sup>であり、CIEが各都道府県視聴覚ライブラリーに提供した。そして、主にアメリカ文化を伝えるCIE映画の上映を積極的に推進した。

しかし、「ひかり号」における映画上映について、CIEからの指導はなかった。むしろ各地域では

CIE 映画よりも劇場映画が好まれる傾向にあり、図書館員は地域の要望を踏まえながら映画の選定をしていたことがわかる。こうした映画会以外に、読書週間に限り「ひかり文化祭」として、NHK のど自慢の合格者を招いた演芸会が1951年、1952年に開催された<sup>22)</sup>。

これらの映画会や演芸会は、地域住民を「ひかり号」に引きつけ新たな利用者をつくり、「ひかり号」の利用につなぐための一つの手段であった。しかしそれだけではなく、こうした「ひかり号」の文化的活動は、農山漁村の地域住民が集まる「場」となり、地域住民と図書館を着実につないだ。このような「ひかり号」が実施した映画会や演芸会について、次のように語っている。

石川：ステーションで映画会ではなく、読書会などの活動はありましたか？

大多和：映画会やるとね、夜遅くなるんですよ。だからその後の座談会とか読書会はほとんどなかったですよ。

山崎：電圧が低くてモーターが回らない。

大多和：だから映画が始まるのが8時頃じゃなかったですか。

山崎：遅いときは10時近くなったり。だって電灯消してくれるのはさ……

大多和：結局ね、農村地帯は電圧が低いですから、近所の人たちにこれから映画会やりますから電気を消してくださいと、地区の人たちに言ってもらって、それからモーターがウーっと。ナトコですが。

山崎：難しいね。図書館員が映画やるっていうのはね。そして夜はどこか、よその家に泊めてもらうんですよ。

大多和：民家とかね。

山崎：青年団の役員の家だとかね。

大多和：山崎さんの家に私が泊まったり、個人の家泊まったり、知っている職員の家泊まったり。そういう宿泊の面ではなるべく安

い旅館に。

大岩：映画について、これは流しなさいとCIEから指導がありましたか？

山崎：いや、やれば向こうが喜ぶわけでしょ。

大岩：それは地元の方が？

山崎：そう利用者。だから、やろうかっていう。

大岩：なるほど。アメリカの映画が多かったわけですけども、後から劇映画や漫画があったというお話があったのですが、流しなさいと指導があったわけではないのですか？

山崎：そうですね。あれはね、やってみてCIEの映画だけでは、どうもお客さんが納得しないという。なんとかその劇映画を借りることができないかというところで検討して、確か、後援会<sup>23)</sup>で少し補助したと思うんですよ。フィルムの借り上げ料ね。

大多和：そう。それでね、友の会が1950年になってから予算的にね、映画会にも潤沢になってきて、フィルムや何かも……

山崎：劇映画を借りれるようになって。

大多和：農村地帯では劇映画を要求したんですよ。納涼映画会とか、我々がその安いフィルムをね、千葉にあったんですよ、業者が。そこから借りて……

山崎：一番多かったのは「野良犬」ね。

大多和：そうそう、三船敏郎の「野良犬」とか。ああいう映画っていうのは毎回やってるとセリフ覚えますね。

山崎：笑っちゃいますねホント。

大多和：それからあと「金色夜叉」とか。ああいう劇映画が農村地帯では喜ばれてね。それで我々は劇映画も上映するようになりまして。それから、廿日出さんがやったのは「NHKのど自慢」。千葉県でのど自慢に合格した人たちを「ひかり号」に乗っけてステーションに行って、1曲歌ってもらう。読書週間の時ですよ。それによって新しい利用者が貸出登

録して……

山 崎：貸出なんかそっちのけでね、そっちのお客さんがいっぱい来るから。

大 岩：1曲歌うことによってお金とかは……

大多和：ボランティア。要するにね、NHKの千葉支局の人が、アコーディオンの伴奏者と2人。だから3人「ひかり号」に乗って……

山 崎：それは読書週間の時だけですよ。のど自慢の第1回目で1位になった人が来ましたね。1947年ぐらいから始めたんですかね。のど自慢というのは。

大多和：横森良造さん。よく民放で出てたんですよ。アコーディオンの。

山 崎：鳴海日出男って人は確か……一番初めに合格した人じゃないかな。有名な。1、2回来ましたね。

大多和：NHKのど自慢で入選した人がひかり号の読書週間に協力してくれたんです。NHKはのど自慢の宣伝を兼ねたわけ。

山 崎：今でいうとカラオケやってる人よりは上手だったね。

### 3.6 自動車の修理

「ひかり号」1号車は、GHQの払下げられたトラック（アメリカ製）の改造車であったため、タイヤの規格が日本製自動車と異なり、図書館員は修理に苦勞していた。

当時の日誌（1951年1月15-16日）には、「朝から小雪が降り、道路もすべり時間内に走行出来ず六合村に三十分延着す。……略……凍った道路が解（ママ）けてスリップ。布鎌小学校生徒の應援を仰ぐ。」<sup>24</sup>とあり、定時の運行は難しく、地域住民の協力を仰ぎながら運行していたことがうかがえる。1951年の統計によると、千葉県内における県道・国道の舗装道は約8%にすぎず<sup>25</sup>、道路の多くは舗装されていなかった。

なお、千葉県の移動図書館の場合、専属の運転手はおらず、「ひかり号」に同乗した図書館員2

名のうち1名が自動車を運転した。こうした「ひかり号」自動車の維持・管理について聞いた。

石 川：移動図書館では本の貸出・返却、映写機の操作以外にも、自動車の修理など、どのような作業をしましたか？

大多和：エンジンがストップした時、自動車をいじったこともないのに、キャブ<sup>26</sup>にゴミが入ったからと言ってね。針金の細いので作業をしましたよ。道路が砂利道ですから、砂埃がすごいですから。今のように全部舗装ではないですから。

山 崎：とにかくお話になりませんよ。特にタイヤね。ボロボロになるとね、パンク屋さんもないんですよ。タイヤっていうのはもう、ほとんどなかったですから。外国からきたタイヤはサイズが違いますからね。もうあれは困りましたね。

石 川：パンクしたり車が故障して、次のステーションへ行けなくなったこともありましたか？

大多和：ありましたよ。

山 崎：もう、パンクは十何回もありましたね。

### 3.7 他地域への影響

関東地区で早期に開始した「ひかり号」は他県に与えた影響が大きかった。したがって、「ひかり号」の運用方法が基礎となり他県に広がったことがわかる。例えば、栃木県では県立図書館の石川昌一が1950年に「ひかり号」を調査し、館長の廿日出より「車のこと、巡回コースのこと、貸出規則、貸出方法等を懇切に教えてくれた。」<sup>27</sup>とある。さらに埼玉県でも1950年に「ひかり号」を調査している。埼玉県立図書館の鈴木四郎は、「千葉県は、その頃生存状況だったものが、（廿日出が一著者注）移動図書館を始めたら生活になったと言うんだよ。……略……その意気込みだけは立派だという感じであてられて帰って来ました。」<sup>28</sup>



と指摘している。

移動図書館の具体的な運用方法は、1953年や1954年に開催された移動図書館の協議会で議論された。ここには各都道府県の館長や移動図書館担当者が全国から集まり、巡回ルート、町村の組織化と運営、図書の貸出方法など、各地域の実践的な課題に基づいて具体的な運用方法が意見交換された。その中で、移動図書館がステーションに1日中停車するという徳島方式も存在したものの、東日本地域では20-30分の短時間停車の千葉方式が与えた影響は大きかった。すなわち、千葉県と同じような巡回方法、さらには運営委員会など同じように町村を組織化し移動図書館を運用する傾向にあった。

国内における1950年中頃までの移動図書館数は、表3の通りである。これによると、都道府県立図書館による移動図書館が戦後急速に広がっていることがわかる。しかし、長野県のようにPTA 母親文庫を実施し、移動図書館を実施していない県も存在した。そこで、他地域からの「ひかり号」視察の受入れや、他県に与えた影響を聞いた。

表3. 移動図書館数の推移（台数）

年	合計	都道府県立 図書館	市区町村立 図書館
1949	3	3	0
1950	10	8	2
1951	20	15	5
1952	33	23	10
1953	40	28	12
1954	49	35	14
1955	53	37	16

典拠：日本図書館協会公共図書館部会移動図書館分科会、埼玉県立図書館編『全国移動図書館基礎調査集計表（昭和39年2月1日現在）』1964.11, p.3.

石 川：千葉県が移動図書館を早期に始めたことで、他県に与える影響は大きかったと思うのですが、例えば、埼玉や群馬などから見学

に来たということは……

大多和：交流はありましたよ。

石 川：頻繁にあったのですか？

大多和：1泊2日でひかり号に乗って、実地を回って、運営の仕方とか地元との関わり方を我々が指導したと言ったらおこがましいですけど。

山 崎：よく来ましたね。

石 川：全国移動図書館協議会でしたか、全国大会が岐阜<sup>29)</sup>で行われたり、千葉<sup>30)</sup>で行われたり。その中で多くの話題があったと思うのですが、徳島方式という、1日中ステーションに停車して、1年間に1回か2回しか来ないという方式がいいのか、千葉方式で1回数十分間の駐車、月一回いろいろな村を回るのが良いのかという議論は……

山 崎：当時はかなり話題になりましたよ。日本を二分する感じになったよ。結局、千葉方式が利用者のためになっていると言う人もいましたね。でも月に1度行くのと、年に1度行くかどうか分からないというのとね……それは話題になりましたね。

石 川：やはり、関東ですと千葉方式……

大多和：そうですね。千葉方式ですね。みんな見学に来て、「ああ、この方式で始めましょう」と手本となったわけですよ。千葉方式が教本に。だから、千葉方式から埼玉とか茨城、栃木、群馬というふうに移動図書館ができましたから。結局、千葉方式を手本にしてやった。

石 川：移動図書館が埼玉や栃木に広がっていく中で、長野は独自に母親文庫をしていたなど、移動図書館をやっている地域とやっていない地域の議論はありましたか？

大多和：特に無かったですね。ただ、長野の館長<sup>31)</sup>が言ってましたが、「長野はよ、千葉みたいな移動図書館つくったら、次に行くのに半日かかったんだよ。いわゆる長野の場合は移動図書館だとね、つまんねえ、つまん

ねえ」ってね……

石川：南北に長い……

大多和：効率が悪いんだよ。日帰りで行けるところなんて長野は何か所も無いよ。ということでね、長野は移動図書館をやらないと。これは叶沢さんの持論でした。

#### 4. おわりに

戦後の移動図書館に携わった元図書館員のインタビューから、具体的な移動図書館実践はもちろんのこと、資料では伺い知ることができない図書館員の意志とエネルギーを読み取ることができる。

1950年代前半、「ひかり号」を担当した図書館員は、図書の貸出以外に、自動車の運転・修理、映画会・演芸会の設営、ナトコ映写機の操作、地域住民との交流など、活動は多岐にわたっていた。図書館員は実際に地域を歩き、住民の表情と地域の空気を感じ、利用者の声を聞きながら移動図書館を創っていた。他方、地域住民は、「ひかり号」への期待と希望を抱き、図書館員とともにその活動を支えていた。

加えて、当時は「ひかり号」が移動図書館活動の「教本」となり、他の都道府県からの視察を受け入れ、具体的な活動方法が広がった。視察の受け入れは、単に移動図書館の活動方法が他の都道府県に伝わるだけではなく、「ひかり号」を担当する図書館員の意志とエネルギーも伝わることになり、「ひかり号」の活動が各地の移動図書館実践の基礎を拓いた。

戦後、混迷とした時代に、移動図書館を通して図書館員が地域に深く溶け込み、地域住民との信頼関係を築きながら、図書館活動を積み重ねていたことがわかる。このことは、積載する冊数や巡回日数など移動図書館の限界を乗り越え、図書館員が地域と図書館を着実につないだことを意味した。図書館サービスが市場化され、そのサービスが売買の対象となる商品へ変質<sup>32)</sup>されつつある現

在、地域と図書館をつないだ移動図書館実践から、見つめ直すべき図書館の本質が隠れているのではないだろうか。

最後に、インタビューに快く応じていただいた大多和誠氏、山崎宏氏に感謝申し上げます。また、千葉県立中央図書館の皆様には「ひかり号」に関する資料の閲覧につきまして便宜を図っていただきました。改めて深く御礼申し上げます。インタビュー音声の文字化には本学卒業生の中島賀子さんにご協力いただきました。

なお、インタビュー並びに千葉県立図書館「ひかり号」の研究には著者らのほか、小黒浩司（作新学院大学）、奥泉和久（横浜女子短期大学図書館）、中山愛理（大妻女子大学）が参加しています。

#### 注

- 1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第3版、丸善、2007.12. 参照は p.9.
- 2) 巡回開始当時は「訪問図書館ひかり」であった。本稿では「ひかり号」と統一した。
- 3) 石川敬史、大岩桂子「戦後移動図書館活動の検証：千葉県立図書館「ひかり号」調査の概要報告」『図書館界』64(2), 2012.7, p.154-163.
- 4) 石川敬史、大岩桂子「移動図書館による映画会活動の分析：1950年代前半までの千葉県立図書館「ひかり号」を中心に」『図書館界』65(2), 2013.7, p.126-134.
- 5) 佐藤郁哉「秘伝とハウターのあいだ：フィールドワーク技術論の可能性についての覚え書き」『民族学研究』58(3), 1993.12, p.272-276.
- 6) 御厨貴『オーラルヒストリー：現代史のための口述記録』中央公論新社、2002.4, 207p.（中公新書、1636）
- 7) オーラルヒストリー研究会編『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』日本図書館協会、1998.3, 386p.
- 8) 安藤友張「戦後日本における図書館史の一面面：

- 三上強二氏インタビュー記録』『九州国際大学教養研究』19(1), 2012.7, p.77-105.
- 9) 小林卓, 大井三代子「戦後の図書館学教育と女性司書(1): 鬼頭當子と大学図書館」『実践女子短期大学紀要』34, 2013.3, p.121-142.
- 10) 宮本常一「調査地被害: される側のさまざまな迷惑」『探検と冒険』朝日新聞社, 1972.6, p.262-278. (朝日講座, 7)
- 11) 安溪遊地「される側の声: 聞き書き・調査地被害」『民族学研究』56(3), 1991.12, p.320-326.
- 12) 千葉県立中央図書館編『千葉県移動図書館ひかり二十年史』1970.3, 213p. 参照は p.47. 本文では, 以後『ひかり20年史』とする。
- 13) 廿日出逸暁の略歴は次の通りである。1929年4月ライプチヒ大学附属図書館, 1933年1月日独文化協会資料室, 1935年5月帝国図書館等を経て, 1935年8月千葉県立図書館長。その後, 1959年6月国立国会図書館連絡部長, 1967年4月実践女子大学教授等を歴任。(廿日出逸暁『図書館活動の拡張とその背景: 私の図書館生活50年』図書館生活50年記念刊行会, 1981.2, 390p.)
- 14) 大岩好昭の略歴は次の通りである。1946年4月千葉県市原実業学校に勤務。この頃から牛久読書倶楽部を結成。牛久読書倶楽部結成に助言した廿日出の誘いもあり, 1949年5月千葉県立図書館に勤務し, 移動図書館を担当。その後, 館外奉仕課長, 庶務課長, 副館長等を経て, 1981年館長に就任する。
- 15) 千葉県総務部統計課編『千葉県統計年鑑: 昭和28年第三期報』1954.2. 参照は「10. 管内自動車台数」p.19.
- 16) 『ひかり20年史』. 参照は p.53.
- 17) 「満15才以上」とある。(文部省社会教育局編『移動図書館の実態』1953.11, p.13参照)
- 18) 『ひかり』2号(1952.1)掲載の「ひかり号巡回予定表1月-3月」をみると, 多くのステーションは30分間の停車であるが, 「本納 1.00-1.40」「南郷 12.30-1.20」「東陽 1.20-2.20」のようにステーションにより異なる場合もあった。
- 19) 『ひかり20年史』. 参照は p.60-67.
- 20) 「昭和二十六年度監査報告」(千葉県立中央図書館所蔵「ひかり号」関係資料).
- 21) 「ナトコ」とは, シカゴの映写機製造会社 National Company の略称.
- 22) 千葉県立中央図書館創立30周年記念事業後援会編『千葉県立中央図書館三十年略史』1956.3, 129p. 参照は p.111.
- 23) 千葉県移動図書館後援会のこと。
- 24) 『昭和25年度日誌』(千葉県立中央図書館所蔵「ひかり号」関係資料).
- 25) 千葉県総務部統計課編『千葉県統計年鑑: 昭和二十七年版』1953.3, 456p. 参照は「134. 路線別道路状況(昭和26年12月末現在)」p.288.
- 26) 自動車のキャブレターのこと。
- 27) 石川昌一「移動図書館が発足するまで」『あけぼの: 栃木県移動図書館三十年記念誌』栃木県移動図書館連絡協議会編, 1981.3, p.53.
- 28) 「移動図書館 OB 大いに語る」『埼玉の移動図書館: 30周年記念』埼玉県移動図書館運営協議会編, 1980.9, p.15-26. 引用は p.16.
- 29) 1953年2月23-24日に開催された第1回全国移動図書館運営協議会(岐阜県岐阜市)のこと(前掲『移動図書館の実態』).
- 30) 1954年3月8-9日に開催された第2回全国移動図書館連絡協議会(千葉県鴨川町)のこと。なお, 第3回は全国移動図書館研究大会として, 1956年6月26-28日に千葉県木更津市で開催された(『全国移動図書館研究大会報告』日本図書館協会公共図書館部会, 1951.8, 105p.)。
- 31) 当時の県立長野図書館長は叶沢清介であった。(石川敬史「叶沢清介の図書館づくり: PTA 母親文庫まで」『図書館人物伝: 図書館を育てた20人の功績と生涯』日本図書館文化史研究会編, 日外アソシエーツ, 2007.9, p.141-161.)
- 32) 山口源治郎「図書館空間の市場化と知る権利保障: 地域住民とともに共同空間をつくる」『月刊社会教育』676, 2012.2, p.4-10.